

神経科学ニュース

Neuroscience News · Japan Neuroscience Society

〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9(財)日本学会事務センター内
日本神経科学学会

TEL: 03-5814-5810 FAX: 03-5814-5825

第27回神経科学大会、第47回日本神経化学会合同大会 (Neuro2004)の御案内

2004年(平成16年)9月21日(火)~23日(木)、大阪国際会議場(グランキューブ大阪)で合同大会が開催される運びとなりました。第47回日本神経化学会大会会長の遠山正彌教授と共同で鋭意準備をすすめております。大会ではプレナリーレクチャー、特別講演、シンポジウム、一般演題(一般口演、ポスター発表)を予定しております。日本神経科学学会は国際化を目指しており、その流れに沿いプレナリーレクチャー、特別講演、シンポジウムは英語で行う予定です。シンポジウムにつきましては会員の皆様には既に積極的な応募をお願い致しましたように斬新なタイトルで新鮮さを求めています(シンポジウム公募締め切りは12月25日となっております)。また出来るだけ一般口演を取り入れる予定です(日本語、英語いずれも可)。一般演題締め切りは今のところ4月15日を予定しております。是非とも積極的な応募をお願いする次第です。

また大会前日の9月20日(月)夕刻より「市民公開講座」を大会会場でもある大阪国際会議場(グランキューブ大阪)で開催いたします。『知られざる脳機能~その解明と応用~』と題して川人光男先生(ATR脳情報研究所)「脳の情報処理の不思議」(仮題)、養老孟司先生(北里大学医学部)「脳の不思議」(仮題)、武田雅俊先生(大阪大学大学院医学系研究科)「心の不思議」(仮題)に御講演をお願いしております。

平成15年11月

第27回日本神経科学大会会長 村上 富士夫

目 次

第27回神経科学大会、第47回日本神経化学会合同大会 (Neuro2004)の御案内	1
The 2nd FAONS symposium and the 3rd Iranian Neuroscience Congress	3
留学体験記	3
シンポジウム・研究会のお知らせ	7
研究助成	11
公募	13
その他	16
編集後記	17

会期・会場・大会長

会期:2004年9月21日(火)~23日(木)

会場:大阪国際会議場(グランキューブ大阪)

〒530-0005 大阪市北区中之島5丁目3番51号

TEL:06-4803-5555 FAX:06-4803-5620

大会長:

第27回日本神経科学大会会長 村上 富士夫

(大阪大学大学院生命機能研究科 脳神経工学講座)

第47回日本神経化学学会大会会長 遠山 正彌

(大阪大学大学院医学系研究科 ポストゲノム疾患解析学講座)

大会事務局:Neuro2004大会事務局

〒541-0047 大阪市中央区淡路町3-6-13

(コングレビルディング 株式会社コングレ内)

TEL: 06-6627-0157 FAX: 06-6229-2556

e-mail: neuro2004@congre.co.jp

演題応募方法

今学会は、神経科学・神経化学の合同大会であり、一般演題は脳・神経領域に繋がる領域も含み、また現在進行中の研究、新しい技術の紹介、さらに症例報告的な発表も含め、両会員相互の意見交換を促進し、神経研究の発展に寄与するものを広く募集します。一般演題は、口演発表(スライドは全て英文にて作製していただきPCによる発表となります。発表は日本語、英語どちらでも可です)とポスター発表(展示内容は英語で作成していただきます)としますが発表形式の最終決定はプログラム委員会に御一任いただきます。

1. 投稿方法

演題抄録募集はインターネットを使用して行いません。本大会では、インターネット以外による応募はできませんので、ご注意ください。また、受領証、採択通知も電子メールにて行う予定です。

1. 筆頭発表者は日本神経化学学会または、日本神経科学学会の会員でなければなりません。登録に際して会員番号が必要となります(神経科学ニュース郵送時のラベルのに記載されています)。発表を予定されている筆頭発表者で非会員の方は [http://](http://www.jnss.org/page/form.html)

www.jnss.org/page/form.htmlの説明にしたがって入会申し込み手続きを行ってください。

2. 参加事前登録に際して日本神経科学学会会員として登録されるか、日本神経化学学会会員として登録されるかを決めていただく必要があります。どちらで登録されるかでNeuroscience Research Supplementの扱い等に違いが生じて参ります。詳細は次回案内を御覧下さい。

3. 演者氏名、所属は、和文・英文併記にてお願いします。抄録は英文にてお願いいたします。Webによる演題申込みの詳細および抄録受付については、第27回日本神経科学大会・第47回日本神経化学学会大会合同大会(Neuro 2004)ホームページに順次掲載されます。稼動開始と同時に本学会ウェブサイトよりリンクを張りますので、学会のホームページのチェックをお願いします。

2. 登録期間(予定)

2004年3月1日(月)~2004年4月20日(火)(=21日(水)0:00)

*筆頭発表者1名につき、1演題(英文)の申し込みとなります。

3. 英文抄録の取扱い

英文抄録については、本学会誌であるNeuroscience ResearchのSupplementに掲載されます(別途掲載料が必要)。

4. プログラム編成

プログラム編成は大会長が委嘱する委員会でおこないます。演題の採否、発表セッション等は御一任ください。本会での発表が不相当と思われるものなどは御遠慮願うことがあります。患者の症例発表やその体組織などを用いた実験では、患者に対して説明と同意を得ていただくとともに秘密保持に細心の注意を払っていただきますようお願いいたします。同様に、動物実験についても倫理面に配慮した内容としてください。

会則の変更について

去る7月24日の総会において、理事会の提案した会則の変更について審議され、原案通り変更が承認されました(神経科学ニュース 2003No5, 11 ページ)。

変更箇所

(国際理事、機関誌理事の選任)

第8条 国際脳研究機構および下部機構の理事会あるいは執行委員である会員を国際理事とすることができる。機関誌 Neuroscience Research の編集主幹である会員を機関誌理事とする。

(学会長の選任)

第12条 学会長は正会員のなかから、第7条に定めるパネル理事、第8条に定める国際理事、機関誌理事、第9条に定める大会理事の投票により選任される。学会長の任期は3年とし、連続の再任は2期までとする。

付則 1

入会金は3000円、会費は正会員、外国人会員を年間9000円、学生会員を年間3000円とする。ただし外国人会員においては、申し出により入会金および会費を減免することができる。

The 2nd FAONS symposium and the 3rd Iranian Neuroscience Congress

May 17-19, 2004, Tehran-Iran

Fax: +98-21-240-3154

e-mail: motamedi@ams.ac.ir

Website: nrciran.modares.ac.ir/FAONS

留学体験記

京都大学医学研究科 先端領域融合医学研究機構
宮川剛

私は、1998年から今年の3月まで、5年弱、アメリカ合衆国で研究を行いました。この間に、メリー

ランド州ベセスダにあるNational Institute of Mental Health(NIMH)、テネシー州ナッシュビルにあるバンダービルト大学医学センター、マサチューセッツ州ケンブリッジのマサチューセッツ工科大学(MIT)と3カ所を転々といたしました。このため、一カ所に腰を落ち着かせてじっくりと研究することはできなかった反面、アメリカの研究機関をいろいろと見聞できたということがあります。その間に経験したことと、思ったことについて書かせていただこうと思います。

私は、二木宏明先生の研究室(東大の心理学研究室、理研脳科学総合研究センター)で、遺伝子改変マウスの行動解析を行っておりました。二木先生の研究室に学部生時代も含めまして7年も在籍しておりましたので、そろそろ留学でもするべきではないかと思い、NIMHのJacqueline (Jacki) Crawley博士の研究室へポスドクとして参加することになりました。Jackiは、遺伝子の機能を明らかにする上で、行動テストバッテリーを用いて遺伝子改変マウスの行動解析をシステムティックに行うことの意義をいち早く提唱しており、これが私の考えにあっておりました。ベセスダに着いてみてまず気づいたことは、研究室の規模が、人数・スペース・予算のどれをとっても非常に小さかったことです。ポスドクは2人から3人(技術員なし)で、Howard Hughes Medical Instituteの奨学金を受ける高校生が1~2人という構成で(Jackiはどうやらこの枠をもっているようでした)、私が滞在していた1年3ヶ月の間に購入したものは、PowerMacintosh G3ひとつといくらかの文房具でした(このコンピューター一個を購入するときも、かなり理由を説明する必要がありました)。かといって、皆が週100時間働いているかということ、そういうことは一切なく、朝7時半にきて午後3時には帰宅するという極めて規則正しい生活をJackiがしているのを始め、ポスドクも比較的のんびりと規則正しい生活をしておりました。Jackiは齧歯類の不安様行動テストで最も頻繁に使われているLight/Dark Transitionテストを初めて考案したことで有名で、また論文も非常に多いので、たいへん不思議な気がしたのですが、ある程度研究をして

いるとなぜそれでやっていけるかがわかってきました。研究のシステムが極めて効率よくオーガナイズされていたのです。私がアメリカに到着したときには、私が行う行動実験に使用する予定の野生型マウスとミュータントマウスがそれぞれ15匹程度ちゃんと用意されていました。また、行動のテストバッテリーがすでにセットアップされており、私としてはただ単に用意されたマウスに用意されたテストを行うだけでした。Jacki自身が実験の行い方を教えてくれましたが、マニュアルとプロトコルビデオが用意されており、極めて効率よくCrawley研究室流のやり方が伝わるようなシステムになっていました。そんなことでしたので、アメリカに着いてからすぐに実験を始めることができ、さらに半年後には論文にできるデータを得ることができました。

そうこうするうちにバンダービルト大学分子神経科学センターでマウス行動実験施設を作る予定で、その立ち上げをする人を募集しているので、応募しないかという話があり応募することにしました。書類審査で通り、ジョブ・トークを行いインタビューを受けました。インタビューは、2日かけて分野的に近い領域の約10人のファカルティーと一人ずつそれぞれ小一時間かけて話をするというものでした。2日間でものすごい量の知的な刺激を受け、また英会話の能力がぐっと高まったように思います。インタビューは受ける方にとっても随分ためになるわけですが、おそらく行うほうにとっても、よい情報収集とコネクションづくりができるのだと思います。アメリカでは、このようなじっくりと時間をかけるインタビューは一般的なようで、講演に招いた演者にも似たようなことを行うことも多いようです。

バンダービルト大学という日本ではなじみは薄いのですが、皮質機能の研究で有名なJon Kaas、統合失調症の研究で有名なHerbert Meltzer (ISIのNeuroscience分野での被引用数トップ50にも入っている；私のグラント申請時に「メンター」になっていただいた)、アルコールのグルタミン酸受容体への作用を見いだしたDavid Lovinger (現、NIH)、イムノトキシンを使った神経破壊で有名なRonald

Wileyなどを始め30以上の神経科学のラボがありました。印象的だったのは、共通実験施設(コア・ラボ)がたくさんあり、研究の協力体制が充実していたことです。マウスを作るコア、神経伝達物質の量を測るコア、組織をみるコア、シーケンスをするコア、マウスの代謝を調べるコアなどがあり、私がマネージャーを務めたマウス行動解析のコア・ラボもその1つでした。個々のラボが独自にそういったものをそろえるのは、研究費、スペースなどの点で効率がよくないのと、「餅は餅屋」ということもあり、これはたいへん賢いシステムだと思いました。また、バンダービルト大学は、テネシー・マウス・ゲノム・コンソーシアムというENUを使ったランダム・ミュータジェネシスのプロジェクト(<http://tnmouse.org/>)の中核機関になっていました。NIHからの年間数億円規模のファンドにより、オークリッジ国立研究所で作られたマウスをテネシー内の6機関・数十の各種研究室で大規模に表現型を解析し、同定されたミュータントマウスはデータベースで公開して欲しい研究者には分与するというプロジェクトです。プロジェクト発足時の全体会議に参加することができましたが、オーガナイザーたちの企画力に目を見張りました。発足して3年弱ですが、すでに面白そうなミュータントがいくつもとれているようです。「コア」でも「コンソーシアム」でもそうですが、「和」の精神を貴ぶ日本より、個人主義のアメリカのほうが研究の協力体制が整っているというのは不思議な気がしました。

ここで私は、Research Assistant Professor というタイトルを持っておりましたが、コアの管理をきちんと行えば、Principal Investigator (PI)としてコアの設備を好きに使って、自由に自分の研究をやってもよいという契約でした。自分自身の研究費はマウスの飼育費しかなかったため、きびしいものがありましたが、行動実験はマウスと実験機器さえあればなんとかはならないことはないもので、NIMHの時から共同研究をしていたNIHのJurgen Wessと山田真久さん(現、理研BSI上級研究員)の協力で、論文一報を出すことができました。また、もとボスのJackiの紹介でMITの利根川進先生と共同研究を始

めたのですが、利根川先生のセンターでやはり行動実験施設をつくるということで、そのスーパーバイザーとしてMITにリクルートされました。

MITでは、Research Assistant Professorに相当するポジションがなかったので、PIステータスを持つResearch Scientistという身分でした。50%は行動実験施設の仕事、50%は自分がPIとして自由に研究を行ってよく、技術員(やはり施設の仕事50%、私の研究の補助が50%)を一人割り当ててもらうことができました。ポジションとしての進歩はなかったのですが、面白いマウスがたくさんいそうなこともあり、移ることにしました。移ってみると、施設の利用者はほとんど利根川研の研究者であり、また、自分がPIの部分も利根川研のマウスをもらって主に研究を行ったので、事実上、利根川研の一員のような感じで研究を行いました。MITでの研究生活はちょうど2年間でしたが、いくつかの意味で密度のたいへん濃いものとなりました。まず、賢くて知識豊富、エネルギーの充満した研究者に囲まれたということがあります。よくもこれだけの人材を集めたなど感心しました。施設のスーパーバイザーという職業柄、次々と「濃い」研究者が訪ねてきて議論を長々と続けていくので、知的な刺激量はずごいものがあり、知恵熱がでるかというくらいでした。アメリカにきてから3年弱が経過し英会話がまともになるようになっていたことも幸いして、大変よい経験ができました。次によかったのは、前脳特異的カルシニューリンノックアウトマウスを解析できて、カルシニューリンと統合失調症の関係を初めて提唱することができたことです。このマウスについての詳細は省きますが、これまで約10年間みてきた各種マウスの中でこれほど顕著でかつ選択的な行動異常のプロファイルを示すマウスはおりませんでした。この発見は、利根川研のコンディショナルノックアウト技術と、私の主要な武器である行動テストバッテリー・ストラテジーが組み合わされて初めてなされた意外な発見であり、非常に幸運でありました。これについての特許を発明者として申請するという機会も得ましたが、私が行っているような基礎研究の成果の特許として出願するという発想自体がな

かった私にとって貴重な経験をさせてもらいました。また、利根川先生は神経科学の分野に移られてからも画期的で素晴らしい研究を連発してらっしゃるのですが、その優れた研究戦略・ノウハウの一端を学ぶことができました(と自分では思っています)。その内容は一応、企業秘密ということにしておきます。

以上のように、私は短期間に米国の3カ所それぞれ違った場所で研究を行う機会に恵まれました。神経科学では米国が世界のトップにあるのは異論がないところだと思いますが、それはなぜか、ということについて考えてみました。研究費の総額や研究人口の数はもちろんなのですが、それ以外にもいくつかの要因があると思いますので、それを私なりの印象としてまとめさせていただきたいと思います。

1. システムが研究オリエンテッドにオーガナイズされている。大学間のコンソーシアム、研究室間のコア・ラボ、研究室内の作業の分担体制と技術員によるサポート体制など、どれをとってみても、与えられたリソースで最大限の結果を出せるように工夫されている。研究者の雑用は少なく、何事も効率的である。

2. 論文を出しやすい。同じ内容でも、日本からきた論文と、アメリカの有名なラボからきた論文ではレビューの反応が違うようである。有名なラボのボスは、エディターが知り合いだったり、自分のかつての弟子だったりするので、いきなり電話して直接説明する、原稿を直接手で持っていくなどしてアピールできるので、全く有利である(日本もインパクトファクターが10を越えるようなメジャー雑誌を持つことはできないのでしょうか)。また、セミナーに有名な研究者をしょっちゅう招いたり招かれたりして社交・情報交換しているが、レビューに社交の成果がもるにあらわれているようである。

3. 優秀な研究者が世界各地から集まっている。優秀な人のみに入国の許可をだし、さらに優秀な人のみに永住許可を与えるわけで、優秀な人が増えるシステムになっている。しかも、優秀な外国人が行った研究成果の所有権はすべて米国が持つわけである。NIH等はこれを意図的にやっているし、米国自体が

国策としてやっているのではないだろうか。

4. 米国の研究者には表現力が高い人が多い。ストーリーのまとめ方について、いかに持っているデータを重要そうに見せるか、そう見せるにはどういうデータが得ればいいのかという方法を心得ている。英語力の問題だけではないようである。トークでもエンターテインメントになっている場合が多い。小学校の教育からして、そのあたり(プレゼンテーションの能力)が強調されているようである。

5. 若手が独立してラボを持てる制度がある。

以上は長所であり、日本でも取り入れられるところは取り入れればいいと思いますが、もちろん欠点もあります。これを次にリストアップさせていただきたいと思います。

1. ポスドクの数が多すぎ、ポジションをとるための競争が強すぎるので、悪知恵を働かせるのに優秀な頭を使っている場合がかなりある。実際に、都合の悪いデータをごっそり抜いたり、都合の悪い結果をうまくカモフラージュしたり、意図的なものを目の当たりにした(具体例はやめておきますが)。まじめにやっていて間違えるということは科学ではやむを得ないことであると思われるが、これはいただけません。しかし、こういうことは、米国では普通に起こっているようである。そういうことを議論しても、「ポスドクとPIの間の巨大なギャップを考えると理解できなくはない」という意見がかなり多いのは驚きであった。

2. 発見オリエンテッドではなく、仮説オリエンテッドな研究を重要視する傾向がある。これは、NIHのグラントの審査でも明示的にいわれているようである。しかし、仮説オリエンテッドがすぎると、自分の仮説にあわないデータは無視し、あうデータだけに注目しがちになり、バイアスがかかってしまう。米国では自説に固執して、悪知恵を働かせるという場合もかなりあるようである。

3. 米国では悪い噂はあまり広まらない。これは、研究者人口が多い、ポジティブ志向なので他人の悪口はいわない、他人の悪口をいって自分がつつかれても困る、というようなことがあるようである。これも、悪知恵が一般的になる要因のようである。

米国の研究システムの長所は素晴らしいものがあり、日本でもこれを輸入するという動きが活発になっているようですが、ただ輸入するのではなく、いい部分のみを日本の文化や風土にうまくあうかたち加工して取り入れることが重要なのではないのでしょうか。また、せっかく大学も法人化されるのですから、米国製の輸入だけではなく、日本独自の新しいシステムをつくって、それを世界に発信しリードしていくということもあるといいかもしれません。

中西重忠先生や鍋島陽一先生ら京都大学医学研究科の教授陣によって計画・立案され、今年4月に発足した先端領域融合医学研究機構(機構長、上代淑人特任教授)はそういった意味でも極めて野心的な機関です(現在、私はここに所属しています)。若手に独立のポジションを与える、研究以外はしなくてよい(してはいけない)、先端技術センターというコアラボのセンターを持っている、産学連携を積極的に推進する等、米国システムの長所を持っています。それだけではなく、「オープンラボ」というかなり独自のシステムを取り入れています。オープンラボでは、いくつかの大実験室に、若手リーダーに率られる小さなチームがたくさん入り、高額機器はもちろん、冷凍庫・消耗品さらには技術員まで共有してしまおうという極めてオリジナルなシステムです。それぞれの研究チームが独立性を保ちながら、日本人の良き協力の伝統が生かされるとすれば、研究費・スペースは非常に効率的に利用できるのでは画期的です。世界各国からリクルートされたバリバリの若手リーダーが狭い場所に集まっているので、知的人口密度と刺激量もMITに匹敵するかと思います。「この中で2~3本ホームランができればよい。数本であれば素晴らしい。」と、むやみに競争を煽っていないことも効果的に働いてか(?!)、ここまではたいへん雰囲気もよい感じですが、新しい試みなので事務的な混乱もいろいろと発生してはいるのですが、そういうことを恐れず、他の機関でもそういったオリジナルな試みが盛んになれば、日本の研究社会が活性化し、世界に対して強い競争力を持つことができるのではないのでしょうか。

INFORMATION

シンポジウム・研究会



第19回国際生物学賞記念 シンポジウム - 最先端光学顕微鏡法で 明かされる分子・ 細胞ダイナミクス -

主催:大阪大学 (代表:柳田 敏雄)

日時:平成 15 年 12 月 3 日(水) ~ 4 日(木)

場所:奈良県新公会堂能楽ホール

参加費:無料

招待講演者:(Abroad) G.Borisy, W.Denk,
Y.Goldman, J.Howard, S. Inoue, T. Jovin, J.
Lichtman, Ted. Salmon, R.Tsien, R.Vale, C.
Waterman-Storer, Yu-li. Wang,
(Japan) Y. Hiraoka, N. Hirokawa, S. Ishiwata, R.
Kamiya, K. Kinoshita, A. Kusumi
A. Miyawaki, K. Oiwa, M. Sokabe, T.Yanagida

連絡先:大阪大学大学院生命機能研究科・
ナノ生体科学講座

〒565-0871

大阪府吹田市山田丘 2 - 2(医学部内 A 4)

谷口 恵里(秘書)

TEL:090-3944-2894 FAX:06-6879-3628

問い合わせ専用アドレス:

intbio@phys1.med.osaka-u.ac.jp

詳細・申込先HP: <http://>

[www.phys1.med.osaka-u.ac.jp/Information/
IPB.html](http://www.phys1.med.osaka-u.ac.jp/Information/IPB.html)

注)参加費は無料ですが、申し込みが必要となります。受付は参加可能人数に限りがあるので受付順となります。



平成 15 年度 生理学研究所研究会 「神経回路網形成と可塑性 機構研究における領 域横断的アプローチ」

日時:平成 15 年 12 月 4 日(木)13:00 ~ 5 日(金)12:00

場所:岡崎国立共同研究機構・生理学研究所・1
階会議室

提案代表者:神谷温之(神戸大学大学院医学系研究
科)

所内世話人:重本隆一(生理学研究所)

12 月 4 日(木)

13:00 ~ 15:00 (座長:東京医科歯科大学大学院医
歯学総合研究科 久保義弘)

「シナプス形成と受容体機能修飾の動的側面」

1. 橋本 浩一 (金沢大学大学院医学系研究科)

「発達期小脳における登上線維シナプスの機能分
化」

2. 藤原 祐一郎 (東京医科歯科大学大学院医歯
学総合研究科)

「自身の発現密度に依存する ATP 受容体 P2X₂ の
性質の変化」

15:00 ~ 15:15 コーヒーブレイク

15:15 ~ 17:15 (座長:カン研究所 大塚稔久)

「神経シナプス結合の分子解剖学~分子構造から
機能解析へ向けて~」

1. 大塚 稔久 (カン研究所)

「プレシナプス active zone 構築の分子基盤」

2. 瀬藤 光利 (科学技術振興事業団 PRESTO)

「シナプス脱構築の分子機構の解明に向けて」

3. 朽尾 豪人 (横浜市立大学大学院総合理学研
究科)

「シナプス後肥厚部 PDZ 蛋白質の立体構造学的
研究」

4. 宮澤 淳夫 (理化学研究所播磨研究所)

「ニコチン性アセチルコリン受容体の構造生物学

的解析」

17:15 ~ 17:30 コーヒーブレイク

17:30 ~ 18:30 (座長:神戸大学大学院医学系研究科 神谷温之)

田代 歩 (The Salk Institute for Biological Studies)

「Rapid motility of dendritic spines and axonal filopodia」

19:00 ~ 懇親会(職員会館 2F)

12月5日(金)

10:00 ~ 12:00 (座長:理化学研究所脳科学総合研究センター 児島伸彦)

「統合失調症モデル動物の行動学的解析～ヒト精神疾患分子機序の理解をめざして～」

1. 水野 誠 (新潟大学脳研究所)

「EGF投与認知障害モデルラットの行動解析」

2. 宮川 剛 (京都大学先端領域融合医学研究機構)

「行動テストバッテリーを用いた遺伝子改変マウスの表現型解析による遺伝子機能の探索:カルシニューリンミュータントマウスの例を中心に」

(参加費):無料

ただし、懇親会の参加費は5000円(学生・院生は2000円)

(参加申し込み):当日参加も可能ですが、可能であれば事前にE-mailでご連絡下さい(11月26日まで)。

(問い合わせ・連絡先)

神戸大学大学院医学系研究科 細胞・神経生理学分野 神谷温之(平成15年度世話人代表)

E-mail: hkamiya-kob@umin.ac.jp



国際シンポジウム 「ことばの起源再考」

言語は、どのような過程を経て、どのような形式で誕生したのかという問題について内外の心理学・神経科学・行動学の専門家が参加してシンポジウムを行います。

日程:12月4日(木)から6日(土)まで

場所:ホテルフジタ京都

要事前申込

問合せ:京都大学霊長類研究所「ことばの起源再考」事務局

araya@pri.kyoto-u.ac.jp

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/meetings/2003/kotobanokigen/symposium.htm>



愛知県発達障害研究所 公開シンポジウム 2004 糖鎖が拓く発達障害研究: 線虫からヒト疾患まで

日時:平成16年2月7日(土)午後 1:30 - 5:45

会場:愛知芸術文化センター 12階 アートスペースA

〒461-8525 名古屋市東区東桜 1-13-2

名古屋市営地下鉄 東山線、名城線「栄」駅下車、東へ徒歩2分

TEL (052) 971-5511 (代) FAX (052) 971-5601

<http://www.aac.pref.aichi.jp/>

プログラム

1:30-1:40 開会の挨拶 所長 加藤兼房

総合司会:仙波りつ子(周生期学部)

1:40-2:25 成松 久(産業技術総合研究所・糖鎖工学研究センター)

「バイオインフォーマティクスを利用したヒト糖鎖遺伝子の網羅的探索と機能解析」

司会:大平敦彦(周生期学部)

2:25-3:10 野村一也(九州大学・院・理)

「発生異常をひき起こす糖鎖関連遺伝子 モデル生物・線虫を用いた解析」

司会:中山敦雄(発生障害学部)

3:10-3:30 - - 休憩 - -

3:30-4:15 山口 祐(The Burnham Inst., USA)

「コンディショナルノックアウトマウスが明らか

かにする神経発生におけるヘパラン硫酸の多様かつ必須な機能」

司会:細川昌則(病理学部)

4:15-4:55 大平敦彦(愛知県発達障害研究所・周生期学部)

「脳の構築と機能を制御するコンドロイチン硫酸プロテオグリカン」

司会:浅野富子(神経制御学部)

4:55-5:40 遠藤玉夫(東京都老人総合研究所・糖蛋白質研究G)

「糖鎖修飾異常による先天性筋ジストロフィー」

司会:若松延昭(遺伝学部)

5:40-5:45 閉会の挨拶 副所長 細川昌則

6:15-8:00 - - 懇親会 - - (愛知芸術文化センター 10階 ガーデンレストラン 華)

シンポジウム参加費:無料

懇親会費:5,000 円(参加ご希望の方は、1月16日(金)までに事務局宛、お申し込みください。)

事務局:〒480-0392 愛知県春日井市神屋町 713-8

愛知県心身障害者コロニー・発達障害研究所
研究企画調整科(担当:柏井)

TEL (0568) 88-0811, 内線 3503

FAX (0568) 88-0829

E-mail: akashiwai@inst-hsc.pref.aichi.jp



千里ライフサイエンス 技術講習会 第34回 「RNAiの技術応用」

日時:平成16年2月20日(金)10:00-16:30

場所:

千里ライフサイエンスセンタービル6階展示場

ねらい:

RNAi (RNA interference) とは、細胞に二本鎖RNAを導入した場合に相同配列を持つ遺伝子の発現抑制が生じる現象である。

遺伝子発現を制御する新しい手段としてRNAiは有用であり、様々な真核生物において技術応用が試みられている。本講習では、遺伝子の機能解析の技術としてRNAiを用い始めたいと考えている方々を対象として、線虫、植物、そして哺乳類培養細胞におけるRNAiの技術応用を紹介する。

コーディネータ:

京都大学医学研究科先端領域融合医学研究機構
助教授 田原 浩昭

プログラム:

1. 線虫におけるRNAiの技術応用(技術解説と実習)

京都大学医学研究科先端領域融合医学研究機構
助教授 田原 浩昭

2. 植物におけるRNAiの技術応用(技術解説)

奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス
研究科

研究員 三木 大介

3. 哺乳類培養細胞におけるRNAiの技術応用(技術解説と実習)

東京大学大学院工学研究科化学生命工学専攻
助手 宮岸 真

参加者資格:

大学もしくは企業の若手研究者で、RNAiの技術応用に関しては初心者である方

定員:30名

参加費:5,000円

申込方法:

・次の(1)~(3)を明記の上、FAXまたはE-mailで下記宛お申込みください。

(1)氏名、所属(大学もしくは勤務先)、役職名または学年、

〒、所在地、電話、FAX番号、

(2)RNAiの技術応用についての経験の程度、

(3)RNAiの技術応用を計画している生物種名

・申込締切後、参加いただく方に参加費の振込先口座番号をお知らせいたしますので、そこに参加費をお振込みください。

・当方で入金を確認次第、領収書兼参加証をお届けいたします。

申込締切:平成 15 年 12 月 26 日(金)(財団必着)。但し、定員を超過した場合は参加者の調整をさせていただきますことがあります。

主催:財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協賛: 株式会社 i GENE

エア・ブラウン株式会社

株式会社ニッポンジーン

和光純薬工業株式会社

株式会社千里ライフサイエンスセンター

問合せ先:

財団法人千里ライフサイエンス振興財団 技術講習会 G 34 係

〒 560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 8 階

TEL:06-6873-2001 FAX:06-6873-2002

E-mail:fjs-lsf@senri-lc.co.jp

URL:http://www.senri-lc.co.jp



千里ライフサイエンスセミナー 「糖鎖の機能解析から糖鎖 創薬への架け橋」

日時:平成 16 年 2 月 27 日(金)10:00 ~ 17:30

場所:千里ライフサイエンスセンタービル 5 階ライ
フホール

主催:財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協賛:株式会社千里ライフサイエンスセンター

後援:21 世紀 COE プログラム大阪大学拠点 “ 疾
患関連糖鎖・タンパク質の統合的解析 ”

着眼点:ポストプロテオーム研究の重要な分野として、糖鎖生物学と他分野との融合をめざしたシステム糖鎖生物学が注目され始めている。糖鎖はタンパク質の機能発揮・機能高度化の鍵を握る物質であり、糖鎖を利用することで、システム糖鎖生物学のゴールともいえる糖鎖治療学という新しい分野を開拓することが出来よう。

糖鎖科学の現状と将来像を、糖鎖治療学の確立を目標とする観点から取り上げる。

コーディネーター:

大阪大学大学院医学系研究科教授 谷口直之
理化学研究所フロンティア研究システムグループリーダー
鈴木明身

プログラム:

特別講演 座長:三菱化学生命科学研究所
所長 永井克孝

糖鎖構造と機能の多様性:糖鎖創薬の基礎

ワシントン大学教授、ノーステック財団參與
箱守仙一郎

感染症と糖鎖 座長:静岡県立大学薬学部
教授 鈴木康夫

エイズウイルス糖鎖生物学 - 何故かくも多くの糖鎖が? -

富山県衛生研究所所長 永井美之
ヘルペスウイルス感染における糖鎖の役割
大阪大学大学院医学系研究科助教授・教授
森泰子・山西弘一

免疫と糖鎖 座長:京都大学大学院薬学研究
科 教授 川崎敏祐

IgG の糖鎖改変と抗体創薬

協和発酵工業株式会社東京研究所主任研究員
佐藤光男

糖鎖認識 Toll 様受容体:感染・がん免疫療法の
開発を旨として

大阪府立成人病センター研究所長 瀬谷司
糖鎖創薬への戦略 座長:高知医科大学教授
本家孝一

肝炎の糖鎖治療戦略

タカラバイオ株式会社主任研究員 小山信人
ファブリー病の糖鎖治療戦略 酵母由来ヒト
型糖鎖含有リソソーム

酵素の酵素補充療法を中心に

産業技術総合研究所糖鎖工学研究センター長
地神芳文

特別講演 座長: 野口研究所顧問 木幡陽

Microbial glycobiology and carbohydrate production

The Ohio State University, Professor Peng George Wang

参加費(講演要旨集含む):3,000円(会員:大学・官公庁職員、財団の賛助会員); 5,000円(非会員); 1,000円(学生)

定員:300名

申込方法:氏名、〒所在地、勤務先、所属、電話およびFAX番号を明記の上、郵便、FAXまたは電子メールで下記宛にお申込下さい。受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振込先口座に参加費をお振込み下さい。入金を確認後、領収書兼参加証を送付いたします。

申込先:(財)千里ライフサイエンス振興財団セミナー(T3)係

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8F

TEL:06-6873-2001 FAX:06-6873-2002

E-mail:dnp-lsf@senri-lc.co.jp

(注:lsfは「エルエスエフ」、lcは「エルシー」)

推薦要領

1. 助成対象研究集会

生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域において、わが国で開催される研究集会に対し、運営経費の一部を助成する。研究集会はかなりの数の国外からの参加者を含む国際性豊かな集会でなければならない。ただし、参加者が1,000名を越すような大規模な研究集会、2国間の研究集会または国内の学会および機関の主催する集会は原則として助成の対象としない。また、平成16年4月以降平成17年3月末までに開催される研究集会であること。

2. 助成金額

助成金は1件50万円を限度とし、予算範囲内で助成を行なう。

3. 推薦者

当財団の指定する学会、協会の代表者、当財団の現任ならびに前任の理事および評議員。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

なお、当財団の現理事、評議員、選考委員は候補者となれない。

5. 推薦方法

ノバルティス財団ホームページ(www.novartisfoundation.jp)からダウンロードした所定の用紙またはそのコピーに必要事項を記入し、当財団事務局に提出する。これとは別に同書類を電子メールで下記アドレスへ送付する。

E-Mail: yfnova@dream.com

6. 推薦受付期間

平成15年(2003年)10月より受付を開始し、平成16年(2004年)1月末にて締切る。なお、推薦締切り後も、助成総額が本年の予算額に達しない場合は、推薦の受け付けを継続する。

7. 選考方法
候補集会の推薦を1月末にて締切った後、ただちに選考委員会において選考する。

8. 採否の通知

選考終了後、直ちに推薦者、被推薦者の双方に採否を通知する。

研究助成



(財)ノバルティス科学振興財団 平成16年度研究集会助成 の募集

標記の件につき日本神経科学学会の推薦を希望される会員は、申請書類に必要事項を記入され、12月20日までに下記へお送り下さい。

会長 小幡 邦彦

【連絡先】

〒113-0033 文京区本郷四丁目2-5

本郷四郵便局留め

日本神経科学学会 山根 慶子

9. 助成金の使途

会場使用料、外国人講演者の招聘費用、抄録集の印刷費など研究集会の開催に直接必要な経費に限る。飲食費などに使用してはならない。助成金は推薦書記載の通りに使用することを原則とする。万一使途を変更する場合には、あらかじめ当財団理事長の承認を求めること。

10. 成果の報告

研究集会の成果及び会計報告を集会終了後2ヶ月以内に当財団に報告するものとする。報告書作成方法等については、集会終了後に当財団事務局より連絡する。研究集会のプロシーディングを刊行する場合には、財団法人ノバルティス科学振興財団(英文の場合にはNovartis Foundation(Japan)for the Promotion of Science)から助成を受けた旨を明記すること。

〒106 - 0032 港区六本木7-8-4 銀嶺ビル5F
財団法人ノバルティス科学振興財団
電話:03-5414-5761
FAX:03-3796-8271
<http://www.novartisfoundation.jp>



平成16年度 厚生労働科学研究費補助金に係わる研究課題の公募について

標記に係わる手続きについては、「平成16年度厚生労働科学研究費補助金公募要項」により行われることとなりました。本補助金の公募は、従来1 - 3月に行っていましたが、最近の不適正経理を踏まえ、補助金の公募・交付の早期化を図り、適正化を図ろうとするものです。

なお、本要項は、厚生労働省ホームページ(<http://www.mhlw.go.jp/wp/kenkyu/koubou04/index.html>)に掲載され、研究計画書様式についても、ダウンロードができます。

厚生労働省大臣官房厚生科学課



成茂神経科学研究助成基金 助成金給付者一覧 (平成15年度)

1. 神経科学の研究に対する研究者の補助、奨励金の交付

- 1 井上 浩一 浜松医科大学 医学部 生理学第一講座 助手
- 2 福井 巖 京都大学 医学部 先端領域融合医学研究機構 助手
- 3 池田 啓子 自治医科大学 医学部 分子病態治療研究センター 講師
- 4 竹林 浩秀 岡崎国立共同研究機構 生理学研究所 助手

2. 神経科学に関する講演会の開催、外国人学者の招聘又は論文発表、図書の刊行等に対する費用の補助

- 1 田中 富久子 横浜市立大学 大学院 医学研究科 教授
- 2 佐藤 真 福井医科大学 医学部 解剖学(2) 教授

3. 神経科学に関する海外の学会に参加するための渡航費の補助

- 1 水野 誠 新潟大学 脳研究分子神経生物学分野 助手
- 2 安東 嗣修 富山医科薬科大学 薬学部 助手
- 3 小野 堅太郎 九州歯科大学 生理学講座 助手
- 4 足立 弘明 名古屋大学 大学院 医学系研究科 神経内科学 客員研究員
- 5 坂田 ひろみ 徳島大学 医学部 発生発達医学講座機能解剖学 助手
- 6 工藤 賢三 岩手医科大学 医学部 薬理学 助手
- 7 松本 知也 産業技術総合研究所 関西センター 特別研究員
- 8 三五 一憲 東京都神経科学総合研究所 発生形態部門 主任研究員
- 9 小川 宏人 埼玉医科大学 医学部 生物学教室 講師

- 10 佐野 裕美 福島県立医科大学医学部附属生
態情報伝達研究所 助手
- 11 地本 宗平 山梨大学 大学院 医学工学総合研
究部 助手
- 12 石井 優 大阪大学 大学院 医学系研究科
助手
- 13 夏目 季代久 九州工業大学 大学院生命体工
学研究科 助教授
- 14 小木曾 昇 岡崎国立共同研究機構 生理学研
究所 文部科学技官

公 募



「生体恒常機能発達機構
研究部門」
岡崎国立共同研究機構
生理学研究所 助手公募

岡崎国立共同研究機構 生理学研究所 発達生理
学研究系 生体恒常機能発達機構研究部門

職名:助手

人数:2名

分野:神経回路の発達およびその制御機構に関す
る研究に精力的に取り組んでいただける方を募
集いたします。電気生理学、分子生物学および
imaging のいずれかに精通している方を希望し
ます。主として新設の当該研究部門鍋倉淳一教
授と協力して研究を行う。

締切:平成 15 年 11 月 28 日(金)必着

岡崎国立共同研究機構 生理学研究所
発達生理学系 生体恒常機能発達機構研究部
門

- 1 職種:助手 2 名
- 2 応募資格:博士課程修了(またはこれと同等以
上の学力を有するもの)
- 3 任期:7 年(「岡崎国立共同研究機構生理学研
究所研究教育職員の任期に関する規則」による、

<http://www.nips.ac.jp/kyujin/> 参照)

4 提出書類:

- (1)履歴書
- (2)論文リスト(全著者名, 論文題目, 雑誌名,
巻数, ページ(始めと終わりのページ), 発行年
を記入すること, 審査のある原著論文と総説・
著書などは分けて記入すること, 印刷中論文は
含むが, 投稿済論文, 準備中論文は含めない。)

(3) 研究概要

(4) 主要論文 5 編以内の別刷 2 部(コピー可)

(5) 推薦書(1 通以上), 照会先(1 件以上)

*原則として, 提出書類の返却は致しません。

5 公募締切:平成 15 年 11 月 28 日(金) 必着

6 赴任時期:できる限り早期を希望する。

7 送付先及び問い合わせ先

(1) 送付先

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地

岡崎国立共同研究機構 総務部人事課任用係

(「生理学研究所 発達生理学系 生体恒常機
能発達機構研究部門 助手公募書類 在中」と
朱書きして, 簡易書留で送付すること。)

(2) 問い合わせ先:

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地

岡崎国立共同研究機構 総務部人事課任用係

電話:0564-55-7122 (給与等の待遇に関する問
い合わせを含む)

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地

岡崎国立共同研究機構生理学研究所

発達生理学系 研究主幹(教授) 伊佐 正

電話:0564-55-7859 ホームページ:[http://](http://www.nips.ac.jp/kyujin/)

www.nips.ac.jp/kyujin/



「生殖・内分泌系発達
機構研究部門」
岡崎国立共同研究機構
生理学研究所 助手公募

岡崎国立共同研究機構 生理学研究所 発達生理
学研究系 生殖・内分泌系発達機構研究部門

職名:助手

人数:2名

分野:視床下部-自律神経系による代謝調節作用
を、主としてマウス・ラットを用いながら分子
生物学的・生化学的手法によって解明するこ
とを目指す。主として新設の当該研究部門箕越靖
彦教授と協力して研究を行う。

締切:平成 15 年 11 月 28 日(金)必着

岡崎国立共同研究機構 生理学研究所発達生理学
研究系 生殖・内分泌系発達機構研究部門

- 1 職種:助手 2 名
- 2 応募資格:博士の学位を有するか、それに相
当する研究業績を有する者
- 3 任期:7 年(「岡崎国立共同研究機構生理学研
究所研究教育職員の任期に関する規則」による、
<http://www.nips.ac.jp/kyujin/> 参照)

4 提出書類:

- (1) 履歴書
- (2) 論文リスト(全著者名, 論文題目, 雑誌名,
巻数, ページ(始めと終わりのページ), 発行年を
記入すること, 審査のある原著論文と総説・著
書などは分けて記入すること, 印刷中論文は含
むが, 投稿済論文, 準備中論文は含めない。)
- (3) 研究概要
- (4) 主要論文 5 編以内の別刷 2 部(コピー可)
- (5) 推薦書(1 通以上), 照会先(1 件以上)

* 原則として, 提出書類の返却は致しません。

5 公募締切:平成 15 年 11 月 28 日(金) 必着

6 赴任時期:できる限り早期を希望する。

7 送付先及び問い合わせ先

(1) 送付先

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地
岡崎国立共同研究機構 総務部人事課任用係
(「生理学研究所 発達生理学研究所系 生殖・内分
泌系発達機構研究部門 助手

公募書類 在中」と朱書きして, 簡易書留で
送付すること。)

(2) 問い合わせ先:

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地
岡崎国立共同研究機構 総務部人事課任用係
電話:0564-55-7122 (給与等の待遇に関する問い
合わせを含む)

〒 444-8585

愛知県岡崎市明大寺町字西郷中 38 番地
岡崎国立共同研究機構生理学研究所
発達生理学研究所 研究主幹(教授) 伊佐 正
電話:0564-55-7859
ホームページ:<http://www.nips.ac.jp/kyujin/>



東北大学大学院生命科学
研究科では、生命機能科
学専攻教授を公募します

1. 募集人員 教授 1 名
2. 所属 生命機能科学専攻 脳機能解析構築学
講座
3. 募集分野 神経科学、神経生物学、認知神経
科学のいずれかの分野で顕著な研究業績をあげ
ておられる方で、本研究科の脳機能解析構築学
講座において新しい研究領域の立ち上げに意欲
的に取り組まれる方。
4. 国籍 国籍は問いません。但し学生の研究教
育指導が円滑に進められること。
5. 着任時期 2005 年 4 月 1 日
6. 担当教育 本大学院のほかに東北大学理学部
生物学科を兼担していただきます。

7. 提出書類(A4 判縦で横書き)

(1) 履歴書

(2) 研究業績リスト

原著論文、総説、著書など。

(3) 論文別刷りまたはコピー 10 編以内 うち主要論文 5 編については、その研究内容を解説した文書(1000 字以内)を添えて下さい。

(4) 従来の研究内容(1500 字程度)

(5) 赴任後の研究および教育計画(1500 字程度)

(6) 過去 5 年間の研究費採択状況(研究代表の場合のみ記載)。

(7) 応募者について問い合わせのできる方の氏名と連絡先(2 名以上)

(8) その他、学会活動(学会役員、シンポジウム等の主催、学術雑誌の編集委員)。

8. 公募締め切り 2004 年 1 月 15 日

9. 書類送付先

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2 丁目 1 番 1 号
東北大学大学院生命科学研究所生命機能科学
専攻選考委員会委員長 飯島敏夫

封筒表面に「教官応募書類」と朱書きし、簡易書留にて郵送して下さい。なお、応募書類の返却はいたしませんのでご了承ください。

10. 本公募の照会先:選考委員会委員長 飯島敏夫
TEL: 022-217-5046

E-mail: t-ijima@mail.cc.tohoku.ac.jp

11. その他:

生命機能科学専攻、脳機能解析構築学講座の現在構成は以下のとおりです。

微小脳解析(教授:嶋田一郎、助教授:水波 誠)
脳機能解析分野(教授:八尾 寛、講師:石塚 徹)、
脳構築分野(教授:仲村春和、助教授:大橋一正)、
脳情報処理分野(教授:飯島敏夫、助教授:笥 慎治)

本研究科に関する詳細はホームページ、
<http://www.lifesci.tohoku.ac.jp> をご覧ください。



ポスドク募集のお知らせ

自治医科大学分子病態治療研究センター細胞生物研究部では、ハイテクリサーチセンター研究事業に関わるポスドクを募集いたします。

1. 採用時期、任期:平成 16 年 4 月から 1 年間(更新可能、最長 4 年間)

待遇:自治医科大学ポスドクター規定による
人員:若干名(下記分野のいずれかを担当してくださる方)

2. 研究分野、テーマ

1) 感覚器(内耳、嗅上皮)発生に関する研究(Six 欠損マウスを中心とした解析)

2) 神経成熟機構に関する研究(生理学的解析、生化学的解析)

3. 応募資格:以下の 3 つの条件を満たす方

1) 博士の学位を有する、又は平成 16 年 3 月までに取得見込みの方

2) 発生生物学、電気生理学、生化学、分子生物学、細胞生物学のいずれかの研究手法に堪能で、協調性があり、意欲的に研究を行う方

3) 喫煙しない方

4. 応募書類(メールでお送りください)

1) 履歴書

2) 業績リストと主要論文の別刷り

3) 今までの研究の概要と今後の研究の抱負(各 1000 字程度、合計 2000 字)

4) 人物、研究能力について問い合わせ可能な方 2 名の氏名・所属および連絡先

5. 問い合わせ及び応募先

329-0498

栃木県河内郡南河内町薬師寺 3311-1

自治医科大学分子病態治療研究センター細胞生物研究部 川上 潔

e-mail kkawakam@jichi.ac.jp TEL0285-58-7311

FAX0285-44-5476

研究室ホームページ <http://www.jichi.ac.jp/biol/home.html>

応募に先立ち研究室の訪問、見学のご希望があれば、ご連絡ください。

締め切り 平成 15 年 12 月 31 日を最終締め切りとしますが、適任者が決まった時点で終了しますので、早めにご連絡ください。

そ の 他



平成 16 年の 学生会員登録のお願い

日本神経科学学会学生会員各位

既に日本学会事務センターより葉書にてお願いのお知らせが行っていることと思いますが、もし未だそのお願いに沿って返事を出されてない方、あるいは何らかの事情にて葉書が届いてない学生会員は下記の要領で至急手続きをお願い致します。

日本神経科学学会
庶務理事 津本 忠治

日本神経科学学会会則に準じ、平成 16 年 1 月以降学生会員に該当する方は氏名、会員番号(この葉書の宛名箇所に記載してあります)、所属、E-mail address を明記の上、在学証明書(学生証のコピーも可)を平成 15 年 11 月 29 日(必着)迄に下記へご送付下さいますようお願い致します(FAX 可)。登録いただいた方は平成 16 年も学生会員として会費を請求させていただきます。なお、登録作業の関係上、お送り頂く在学証明書もしくは、学生証のコピーは A4 の用紙をご使用下さい。

平成 16 年 3 月末に卒業・修了等により学生会員の対象からはずれる予定の方につきましては、今回ご申請(登録)いただきました場合は、平成 16 年 12 月末日まで学生会員としての扱いとなります。但し、平成 16 年 9 月 21 日～23 日に予

定されております第 27 回日本神経科学大会では正会員としての扱いになりますことを御了承下さい。もし、平成 16 年 4 月以降正会員への変更を希望される場合は、その旨を会員担当係りへご通知いただければ差額を支払っていただいた上、そのように変更させていただきます。

なお、今回学生会員の登録をお忘れになりますと、平成 16 年 1 月以降は自動的に正会員の会費を請求されることとなりますので、お忘れなきようよろしくお願い致します。

【連絡先】

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9
(財)日本学会事務センター 3F
日本神経科学学会 学生会員登録係り
TEL.03-5814-5801 FAX.03-5814-5820
(平成 15 年 12 月 31 日まで)

不明な点等があれば下記へお尋ね下さい。

〒113-0033

文京区本郷四丁目 2-5

本郷四郵便局留め

日本神経科学学会 山根 慶子 TEL FAX 03-3813-0272、E-MAIL ADDRESS

jnss@mb.neweb.ne.jp



平成 16 年 1 月 1 日より、
本学会の事務所及び、
郵送先を以下のように変更します。

所在地:

〒113-0033

東京都文京区本郷 2 丁目 37 - 6 稲毛屋ビル 5 階

郵送先:

〒113-0033

東京都文京区本郷四丁目 2-5 本郷四郵便局留め

日本神経科学学会 山根 慶子



神経科学ニュース、 神経科学学会ウェブサイトへの 記事の掲載について

学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構ですでお送りください。

1. 原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。

(a) 受付可能なファイル形式は Word(2001 以前)、EG Word(11 以前)、Kacis Writer です。それ以外にも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作成に用いたアプリケーションに関わらず HTML、rtf ファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。

(b) 画像ファイルは PICT、JPEG または TIFF ファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。

2. 校正は行いません(お送りいただいたファイルをそのまま利用します)ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。

3. ニュースへの掲載は1回のみとさせていただきます。



神経科学ニュース電子版 パスワード

本ニュースの電子版のダウンロードには Umin のパスワードが必要です。皆様方の会員固有の user ID、パスワードを入力してください。半角で、大文字小文字を区別して、入力してください。

編集後記



今月号は引退していた老兵が復活です。狩野先生のご都合で編集後記と校正をお手伝いすることになりました。このニュースが出る頃には日本の将来を決める選挙の結果がでている頃だと思います。どうなるのか大変気掛かりです。周りの大学生を見ていると最近の若者は選挙への関心が低く、投票に行かない人が多いのが気になります。研究室にいる中国人が自国では投票権がないので羨ましく思う。それなのに何故行かないのかと議論をふっかけていました。投票しても容易には変わりませんが、投票しないと変わらないことを理解して欲しいものです。神経科学ニュースも現在のスタイルになって大分時間が経ちます。そろそろ、若手が台頭して紙面やスタイルを一新してくれることを願っています。

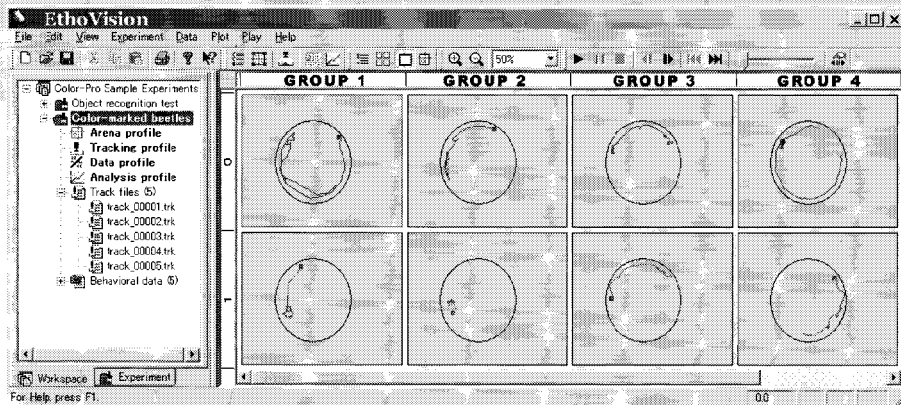
(村上記)

発行：広報委員会
村上富士夫(委員長)
狩野方伸(ニュース編集小委員会委員長)
蔵田 潔(電子化推進小委員会委員長)
白尾智明(ホームページ担当小委員会委員長)

ノルダス

自動行動追跡・解析用ビデオ・トラッキング・システム

エソビジョン3.0



エソビジョンはこんな装置です

- ◇ 例えば16個並べたケージにそれぞれ2匹ずつのラットを入れ、その32匹のすべてを追跡したい…。エソビジョンはこんな実験にパーフェクトに対応するビデオ・トラッキング・システムです。各個体の移動距離・速度、軌跡の形状、特定エリアでの滞在頻度・時間、レイテンシーなどの解析はもちろん、ソーシャル・インタラクションとして接近、回避、各個体間距離まで解析します。特に「数をこなさねばならない実験ルーティン」を力強くサポート。煩雑な作業はすべて自動化できます（上記はすべてエソビジョン・プロの仕様です）。
- ◇ ケージはもちろん、プラスメイズ、ラジアルメイズ、ウォーターメイズ、オープンフィールド等すべての実験系に1台で完全対応します。主要な実験系には、サンプル・プロトコルを標準装備。ビギナーの方でもすぐにルーティンで使いこなせます。

さらに、格段に進歩した「バージョン3.0」では…

MPEGをはじめとするメディアファイルを映像ソースとして利用可能。これには実に多くのメリットがあります。

例えばDVDには最長で5時間もの映像を保存することができます。しかも映像のアクセスはほとんど瞬時。従来のテープ類に比べ、使い勝手・保存性で圧倒的に優れています。

メディアファイルを使用すれば、「早送りデータ取得」が可能になります。しかもテープのように時間情報が失われることはありません。パワフルなPCを使用すれば、例えば連続24時間分のデータを数時間で取得完了。

*1. エソビジョンの完全な機能実現にはUSBキーが必要ですが、これがなくても「データ取得」以外のすべての機能を使用することができます。

さらにあります。従来、必須だったA/D変換ボードが不要です。これは、ノートパソコンでもデータの取得が可能、という画期的な事実を示します。

ノートが使える。しかもエソビジョン自体にコピー制限はありません*1。そしてエソビジョンは、1つの実験プロジェクトの内容をたった一つのファイルに格納することができます。これを例えばネットワーク上に置けば、メイン・システムの所在に拘束されることなくどこでもデータの取得・解析が可能ということです。さらに複数のPCで解析を分担、などの離れ業も。

1台で、複数台の活躍。エソビジョンは、次世代の実験形態を先取りします

まだまだあります。従来からご要望の高かった、TTLパルス・ジェネレート機能を追加。例えばラットが特定エリアに入ったとき、フィードを起動させるためのトリガパルスを出力できます。

従来はどうしても観察者の手を借りねばならなかった強制水泳実験。しかしエソビジョン3.0は独自のアルゴリズムを採用し、ラットのボディサーフェスの変化から「静・動」を自動判別し、カウントします。

詳しい資料のご請求・デモンストレーション等をご相談ください。



ノルダス社日本総代理店

ショーシンEM株式会社

〒444-0241 愛知県岡崎市赤浜町蔵西 1-14

TEL: 0564-54-1231 FAX: 0564-54-3207

www.shoshinEM.com info@shoshinEM.com